
三度目の巡り愛

Rina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三度目の巡り愛

【Nコード】

N2871W

【作者名】

Rina

【あらすじ】

一度目は桜の木の下で皆と。
二度目は桜の木の下で二人で。
三度目は？

沖神の子有り小説です。遠くに居ても互いを想い合つ。
戦地から帰って来る沖田。
子供達と遊びに行く神楽。

わあ、三坂田はすごいですね？

タイトル「巡り廻」の廻はむねじです。

一途な待ち人

総悟が戦に行つてからもう4年たつんだよ。

私は今、20歳だから、総悟は24歳だね。

私は14歳の時、エイリアンバスターになるために宇宙へパイプと一緒に旅立った。…淡い恋心を抱いて。

初めて顔を会わせたのは桜の木の下だったね。叩いて被ってジャンケンしたよね。あの時はまだ何も思わなかった。

だけど、公園で会う度にアナタの知らない一面が見れた。

喧嘩しながら私の初恋はできたの。

そして、宇宙へ旅立つ日、さよならを言おうとしたけど、しなかった。したら、また会いたくなっちゃうから。

それから2年。私は地球に帰つて来た

満開の桜の木の下でアナタに会つた日を思い出していたの。

そしたら、アナタが来た。2年分の喧嘩をしたね。喧嘩が終わつたら、二人で桜の木を見た。

ずるいヨ、総悟は。だって私が言おうとしたこと、先に言っちゃつうんだもん。珍しく顔を真っ赤にして、小さい声で「好きでさア」だって。スゴく驚いたヨ。

勿論私の気持ちも伝えた。そしたら、優しく抱きしめてくれた。お互い真っ赤になりながら暫く抱き合つてたね。

その日、私達は 初めて をした。私は自分の処女は好きな人に捧げるって決めてたからとつても嬉しかったんだ。

次の日の朝、私はまた宇宙へ旅立った。

総悟も戦に旅立った。お互い別れる時に私は「ありがとう」って伝えた。アナタは驚愕してたね。理由を聞かれたから私は応えた。「私の初めてをしてくれたから」って。恥ずかしくて附せていたら、アナタも言った。「俺も初めてだった。ありがとう」って。

お互い真っ赤になりながらキスをした。笑って別れたね。

ねえ、総悟。今、私は地球に居るの。何でだと思っ？実はね、3年前に双子の兄妹が産まれたんだ！お兄ちゃんの方は「総兔」って言うんだ。総悟の総に夜兔の兔だよ！女の子は「真」って言うんだよ。真選組の真だよ！

総兔は栗色の髪の毛で赤い目の私似なんだ！真はオレンジっぽい髪の毛で青い目の総悟似なんだ！

二人とも今、3歳だよ。二人を産んだ時は皆喜んでくれたよ。銀ちゃんも新八も姉御もツラもマダオもツツキーもババアも猫耳ババアも。皆喜んでくれた。

二人ともスクスク育っていったよ。総兔は道場に行かせてるんだ。夜兔の血を引き継いでいるから、二人とも怪力なんだけど、さすが総悟の子。まだ3歳なのに、5人相手でも、勝っちゃうんだ。

真は私が直接体術を教えるよ。こつちも人間の大人相手でも、勝つよ。

二人とも元気に仲良しなんだ！

…だけど、総悟。アナタは嬉しいかな？だって夜兔（化け物）の血を引き継いでいるんだよ？総悟の血が混ざったおかげで二人とも日光には大丈夫だよ。けれど夜兔の血を引き継いでいるから、傷の治りは早い。嫌じゃないのかな？

二人には友達がたくさんいる。私が夜兔ってバレたら子供達に迷惑になるんじゃないかな？

二人には父親の名前は言っていない。もし、総悟が嫌がったら父親にさせないようにするためだ。ケド、やっぱり聞かれる。「とーしゃまはどんな人なんでしゅか？」「なんでとーしゃまはいないアリユカ？」私はこう答える。

「父様はとてもかっこよくて強い人アルヨ。今は遠くにいるケド、帰ってくるアル。だって母様の初恋の人だから。」

子供達に言いながら、自分に言い聞かせる。だけど、不安だ。皆、私の不安を分かってくれている。相談にのってくれる。銀ちゃんは「ま、総一郎君の神楽の溺愛ぶりをみたら心配ないぜ。アイツ、お

前が居ない間脱け殻だったもん」新八や姉御は「大丈夫よ。好きな人なら信じなさい。」「沖田さんはそんな些細なことを気にするんじゃないよ」などと言ってくれる。

皆のおかげで少し気が楽になった。そんなことを思いながら私は微笑んでた。遠くから子供達の呼ぶ声が聞こえる。

「かあしゃま、はやくう〜！」

「はやく、そうとと戦いたいアリユ〜！」

「ハイハイ！今行くアル〜！」

総悟、早く帰って来てネ。総兎と真が待ってるヨ。

そんなことを思いつつ私は元気な子供達を追って行った。

溢れる想いは愛しいアイツの事だけ（前書き）

はい。沖田の1人語りです。

大体の時の流れは神楽の方ので書いてしまっ
て何かグダグダしちや
つてます。ご了承を…。

では、本文へ

溢れる想いは愛しいアイツの事だけ

戦に出てから早4年。結果は俺らが勝った。たくさんの部下を亡くしたが、幹部は全員無事だ。

もう駄目だと、思うこともあった。だけど、アイツがいるって、待ってるって思うと不思議と気力が湧いてきた。

アイツと初めて会ったのは花見の時だったかな。あの時は焦った。自分より年下のしかも女に互角で戦ってたから。でもまあ、後から夜鬼ってわかって納得した。それから、公園で会っては喧嘩して、楽しい日々だった。会う度にアイツが愛しくなってきた。

別れは突然だった。アイツの姿が見えなくて旦那に聞いたら、「アイツは宇宙へいったぜ。」と、言っていた。なんで言ってくれなかったんだ、と思つてたら旦那が「お前にさよならを言うと、決心が揺らいじゃうんだってさ。」その言葉の意味が分からず、悩んでたら旦那がニヤニヤしていたので何かムカついたからバズーカを撃つたのを覚えている。

それから、2年間俺は脱け殻だった。アイツに会えないのがこんなにも寂しいものなのかと思った。

その日、俺は何となく桜を見に行こうと思った。木の下に人影があった。一歩一歩近づき、その姿を見て驚愕した。雪の様な肌によく映える真っ赤なチャイナドレス、桜を見上げる二つの透き通った目、風になびくオレンジっぽい髪。俺が初恋をした女。アイツは俺に気づくと、とても柔らかかに微笑んだ。そして、どちらからスタートするわけでもなく、2年前みたく戦った。アイツはとても強くなっていた。結果は引き分けだった。勝負は着いてないけど、お互い笑っていた。

アイツは明日、また宇宙に行ってしまうらしい。実を言うと俺も明日、戦に行く。その事を伝えたらアイツは酷く悲しい顔をした。

そして俺は、自分の気持ち伝えたい。アイツは一瞬目を見開いた。

そして、微笑んだかと思うと「私も好きアル」と言った。

そしてその日、俺はアイツを　神楽を抱いた。

翌日別れる時に神楽は「ありがとう」と言った。唐突に言われてびっくりしたが何の事か分からないので、理由を聞いた。そしたら、「初めてをしてくれたから」とのこと。

実を言うと俺も初めてだった。俺は昔っから女になんて興味なかった。だけど、神楽に会ってからアイツの事しか考えなくなった。俺が初めて女に興味を持った瞬間だった。女と言っても神楽だけだ。他の奴等なんてカスに等しい（姉上以外）。勿論神楽が初めてだ。神楽以外誰も抱かない。俺はお礼と共にそう言った。するとアイツは顔を真っ赤にした（俺もだが）。

お互い真っ赤になりながらお別れのキスをした。俺も神楽も笑って別れた。

それから、俺は真選組の仲間と共に戦った。過激派の攘夷の輩だったから手間取った。戦が終わり、動けない者も居たためその場で俺達は療養した。気が付くともう4年経っていた。神楽は元気かな？大きな怪我はしてないだろうか？エイリアンバスターやってんだらうな？　様々な想いが溢れてくる。

心配しているのが顔に出ているのか、近藤さんや土方コノヤローが言葉を掛けてくれる。

「チャイナさんは大丈夫だろ？折角の美少年が勿体ないぞ！お妙さんは今何してるかな？」

「フン。お前が言える義理じゃねえだろ。さっさと怪我治せ。」

なあ、神楽。今、お前は何してる？ちゃんと飯食ってるか？仕事サボってないか？心配ばかり浮かぶけど、俺はお前に堪らなく逢いたいんだ。

また、一緒に。(前書き)

はい！完結です。

かなりスクロールしないといけないかも…。

では、本文を…

また、一緒に。

その日、沖田は近藤、土方、山崎と共に歌舞伎町を歩いていた。つい先ほどこの町に戻ってきたばかりだ。戦をしてきた真選組には長期の休暇がある。それで、4人は桜を見に行こうということになったのだ。

「いや、懐かしいな。4年も経っているのに何にも変わって無いな」
「フン。ま、それだけ皆すっかりやつてるんだろ」

と、会話をしていると、久しぶりのアルトボイスが聞こえた。

「お、多串君たちじゃないの」
「皆さん、お久しぶりです！いつ帰っていらしたんですか？」

4人が振り向くとそこには相変わらず死んだ魚の様な目をした男と、身長が結構高くなった眼鏡の青年がいた。

「おお！万事屋と新八君！元気にしてたか？つい先ほど帰って来たばかりだ。」

「久しぶり。旦那に新八君！」

「お久しぶりでさア」

「チツ。帰って来て最初に会った奴がコイツかよ！」

「まあ、いいじゃんか多串君」

「多串じゃねえ！！」

会話に一段落ついたところで6人は満開の桜を見た。
ふと、銀時が呟く。

「お前らが戦にでてもう4年か…。」

「長いようで短かったですね。」

新八もしみじみと言う。

「ああ、一時はどうなるかと焦ったが、皆よく働いてくれたなあ」

「ああ。戻ってきた奴らも、逝つちまった奴らも」

そこで会話が途切れる。

桜を見上げている6人の耳に子供の声が聞こえた。6人は声の聞こえた方へ顔を向ける。そこには二人の幼い子供がいた。

総兎と真は暇があつては戦っている。総兎は竹刀で、真は番傘で。

こつすることで自分の弱点を見つけたり、互いの強さを確認し合つ。

「そうと！今日こそは勝つアリユ！！」

「こつちのセリフだつーの！！」

そうして互いに武器を構えてタイミングをはかる。

一方神楽は遠くでそれを見守っている。

ザアツと風が吹き、二人は同時に地を蹴った。

総兎が降り下ろした竹刀を真が番傘で受け止める。間合いをとり、総兎の懐に跳びげりをする。蹴りをかわし、今度は総兎が真の脇腹を狙つて突く。何とか番傘で受け止めると後ろに飛び、番傘の銃を発射した。銃をかわし、また、双方の武器がぶつかる。

「ほわちやああ！！」

「やあ！！」

神楽は遠くで戦っている二人を見て、その姿をかつての自分達に重ね合わせていた。

やがて二人の息が徐々に切れてきた。

「そろそろアルカ」

そう呟くと神楽は立った。

俺達はその子供達を暫く見ていた。
山崎が言った。

「あの、あの子達、チャイナさんと沖田隊長に似てませんか？」

その言葉でハツとした。何か違和感があると思ったら、それだ。あの子供達は俺と神楽に似ている。両方ともチャイナ服を着ている。

暫く様子を見てると戦っていた子供達は肩で息をしている。

「そろそろ、止めなくちゃいけないんじゃないですかイ」

俺がそう言い、旦那と眼鏡を見ると二人とも柔らかな笑みを浮かべていた。不思議に思い、口を開こうとすると、旦那が喋った。

「いや、いいぜ。もうそろそろアイツが来るから…。んじゃあ、沖田くん以外は退散！！」

そう言い切ると、俺を置いてどっかに行ってしまった。

「ちよつ！何すんだ！天パ！！」

「（ボソツ いいからついてこい。面白えもん見れるから！」
「はあ！？」

「旦那ア！何で俺だけっ！ってかアイツって誰でさア！！…行つち
まいやしたか」

俺は溜め息をつくど、子供に目を向けた。まだ戦おうとしていたの
で止めさせようと近寄ったその時、

「総兔！真！もう終わリアル！！」

ずっと聞きたかったその声。俺は恐る恐る声をかけた。

「…か…ぐら…？」

ソイツはハツとして、こちらを向いた。そして、俺を見て目を見開
いた。

「…総悟……？」

やっぱり…神楽だった。

「かーしゃま。このお兄ちゃん、誰でしゅか？」

子供の質問に神楽が答えた。その答えを聞いて、俺は驚愕した。

「…総兔、真…。…父様アル…」

暫くの沈黙。

「「ええー!!」」

「神楽…。」

驚いて名前を呼ぶ俺に、神楽は涙を流しながら答えた。

「私達の子供アルヨ…」「マジでか」

俺が信じられない様に呟くと、神楽は不安そうに言った。

「あっあの！総悟が嫌なら…」

俺は神楽の言葉を遮って微笑みながら、言った。

「とても、嬉しいぜイ」

そう言つと、神楽は俺に抱きついて泣いた。

「…っ！もっもし、嫌がっ…れたら…どっどっしよっつて…っ！」

俺もまた抱きしめ返して言った。

「大丈夫でさア。俺は嫌がったりしねえよ。今、スゲー幸せなんで
イ」

そうしてると子供達が俺に話し掛けてきた。

「とーしゃま！かーしゃまをなかしちゃだめでしゅよー!!」
「そうアリユ！」

俺は苦笑しながら子供達に聞いた。

「なあ、お前ら、名前は？」

「そうとでしゅ！」

「まことアリユ！」

「そうか……。いい名前だなア。俺は沖田総悟でさア。よろしくな！
総兎、真」

俺がそう言っていると、総兎と真は抱きついて来た。

「とーしゃま〜！」

「会いたかったアリユ〜！」

総兎と真を抱き上げて、俺は神楽に聞いた。

「神楽」

「ん？何アルカ？」

神楽は附せていた顔をあげて応えた。

「こいつらの名前の漢字は？」

すると、神楽はああと言い、話した。

「総兎のそうは総悟の総。と、は兎アル」

「真は真選組の真アル」

「…良いのか？」

「へ？何がネ」

「いや、名前でさア。だって、神楽の漢字が入ってないぜイ」

俺がそう言つと、神楽は俺に近づいてきて、言った。

「いいアル！だって、私は総兎に入ってるネ！」

言われてみれば、総兎のとは、兎って言ってたな。なるほど…。夜兎の兎っていう訳か……。

俺が考えていると、不意に神楽が桜を見上げながら、喋った。

「また、桜アルナ…。」

「ん…ああ。…そうだな…。」

つられて桜を見上げる。

気づけば総兎も真も見上げていた。

また、今年も満開だ。

一度目は皆で。

二度目は二人で。

三度目は四人で。

三度目の巡り愛

くおまけく

「ほ、チャイナさんの子供だったのか」「どうりで総悟に似てる訳だ」

「それにしても、チャイナさんと沖田隊長があんな仲だったとは俺知りませんでした。」

「僕たちも神楽ちゃんが妊娠したって聞いてから初めて知ったんですよ。ね、銀さん」

「ん、まあな。ま、俺達はアイツらを見守ることだな」

「…そうだな」

四人も満開の桜を見上げた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2871w/>

三度目の巡り愛

2011年10月9日15時59分発行